

# あなたとの相棒



人間誰しも、大切な人・物・場所があるはず…。府立生野高校写真部の皆さんと一緒に、そんな誰かのかけがえのない「相棒」を紹介します。第4回目は、イラストレーターであり、絵本作家でもある「しまぎきたまこ」さんです。



## 100色で描く優しい物語

絵は作者の手柄を表す。

柔らかい色鉛筆で描かれたイラストたち。まるでそこから抜け出したような女性が私たちの前に現れた。

「自画像を描いたことはないのですが、似てるねってよく言われます」。

どの絵にも優しくそくに微笑む登場人物がいる。一枚の絵に、物語が描かれているようだ。

「私の絵は、下地に水彩絵の具は使っていますが、あとの90%を色鉛筆で描いています」

小さい頃から絵を描くのが好きだった。本格的に描きたいと思ったのは高校生の時。そこから京都の美術専門の短期大学に進学した。

「油絵などもよく描いていたのですが、短大の課題で、自分より大きい板に絵を描くというものがあつたんです。自分らしい絵を模索していた時に色鉛筆と出会いました」

色鉛筆の楽しさを知ったしまぎきさん。今では100色の色鉛筆を相棒に数々

「アイディアを考えるまでに時間がかかりますね。感動した時によく浮かびます」

の作品を手がけている。

「アイディアを考えるまでに時間がかかりますね。感動した時によく浮かびます」

そんな中でも、絵本「はじめまして！ ましろくん」は特別な作品。彼女が、今まで出会った人たちを思い浮かべながら描いた。

「人は出会い、必ず別れる時がきます。この絵本には、出会えたことに感謝を！」という思いを込めています」。

絵が描けなくなったときは、個展での来場者ノートや、イラストを見た人からの手紙を読み返す。すると、不思議と力が湧いてくる。これからも、めいりっぱいの「ありがとう」を色鉛筆にのせ、描き続けるだろう。

しまぎきさんは現在、天美商店街のこみゆにてひろばNIKOで子どもたちに絵を教えている。

「子どもの世界にも制約はありません。学校・家庭・兄弟間ですら、こうしないと決められないと決まらなくていいと思います」

ここでは、ありのままの自分を開放できる場所として子どもたちを迎えたいですね」

「子どもたちの世界にも制約はありません。学校・家庭・兄弟間ですら、こうしないと決まらなくていいと思います」

ここでは、ありのままの自分を開放できる場所として子どもたちを迎えたいですね」

ここでは、ありのままの自分を開放できる場所として子どもたちを迎えたいですね」

ここでは、ありのままの自分を開放できる場所として子どもたちを迎えたいですね」

ここでは、ありのままの自分を開放できる場所として子どもたちを迎えたいですね」

ここでは、ありのままの自分を開放できる場所として子どもたちを迎えたいですね」

ここでは、ありのままの自分を開放できる場所として子どもたちを迎えたいですね」

ここでは、ありのままの自分を開放できる場所として子どもたちを迎えたいですね」

